

『ベートーヴェンの生涯』片山敏彦訳

二〇一六年七月二十三日（土）午後二時―四時 作成 清原章夫

今月の音楽

一・ベートーヴェン（独・一七七〇～一八二七年）

ゲーテの悲劇『エグモント』への音楽 作品八十四 より

「序曲」 第八曲「メロドラマ」 第九曲「戦いのシンフォニー」

（二）演奏 ヘルベルト・フォン・カラヤン…指揮 ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

エーリッヒ・シェロウ…語り手 録音…一九六九年一月

（二）曲目解説 一八〇九年五月からウィーンは再度フランス軍に占領された。ホーフブルクおよびアン・デア・ウィーン両劇場は数週間閉鎖されることになった。七月にフランスの劇団により再開されたが、フランス人好みのイタリア・オペラと宮廷バレエだけに使われる有様であった。こうした時期に、ウィーン宮廷劇場の支配人であるヨゼフ・フォン・ルクセンシュタイン・ハルトルは劇場救済基金のための慈善興業を計画したのである。ハルトルはゲーテの『エグモント』とシラーの『ヴィルヘルム・テル』に音楽を付けることを思い立った。そして、『エグモント』の作曲をベートーヴェンに依頼した。ちなみに、『ヴィルヘルム・テル』はボヘミア出身のアーダルベルト・ギュロヴェッツ（一七六三～一八五〇年）に依頼した。ベートーヴェンは、「ヴィルヘルム・テル」に曲をつけたかったようであるが、敬愛するゲーテの作品ということもあり、否応なしに引き受けた。

ゲーテの悲劇『エグモント』は史実に基づいた物語であり、実在の人物、ラモラル・エグモント（一五二二～一五六八年）をモデルにしている。

舞台はスペインの王政下で苦しむ十六世紀半ばのオランダ。フランドルの領主エグモント伯爵は祖国の独立のために立ち上がる。しかし、逆に体制側に捕らえられ、反逆罪で死刑を宣告されてしまう。伯爵を愛するフィアンセのクレールヒエンはあらゆる手を尽くして伯爵を救出しようとするが、万策つきて望みも絶たれ、失意のうちに服毒自殺をしてしまう。

死刑執行の時がきて断頭台に連行されるエグモントの眼前に突然クレールヒエンの幻影が出現して、伯爵の勇気と正義をほめたたえ、その行動を祝福する。ベートーヴェンの作曲した音楽は序曲を含めて十曲である。

「序曲」 雄大ではあるが、悲劇を暗示する悲壮感に満ちた序奏部に始まり、死をもって達成される英雄の勝利を示して序曲は閉じられる。

第八曲「メロドラマ」 エグモント伯爵の独白による前半と、彼の信念の固さを示す後半の器楽の演奏から成る。

第九曲「戦いのシンフォニー」 悲劇の主人公エグモントとクレールヒエンの魂の救済と英雄精神の勝利を示している。

二・ベートーヴェン ピアノ・ソナタ第十四番「幻想曲風ソナタ」 作品二七一―嬰ハ短調『月光』
第一楽章

（二）演奏 ヴィルヘルム・ケンプ…ピアノ 録音…一九六五年一月

『ヴィルヘルム・テル』詩: ゲーテ(Johann Wolfgang von Goethe)

「メロドラマ(終幕)」

劇音楽 エグモント Op.84 より

甘き眠りよ!お前はやって来るのだ 純粋な幸せのように
乞われずとも 自発的に喜ばしく
お前は解きほぐく 厳密な思考の結び目を
混ぜ合わす 喜びと悲しみのあらゆる姿を
妨げられることなく流れるのだ 内面の調和の輪は
そして心地よい狂気に包まれて
われらは身を沈め 存在を止めるのだ

Stüßer Schlaf! Du kommst wie ein reines Glück
ungebeten, unerfleht am willigsten.
Du lösest die Knoten der strengen Gedanken,
vermischest alle Bilder der Freude und des Schmerzes;
ungehindert fließt der Kreis innerer Harmonien,
und eingehüllt in gefälligen Wahnsinn,
versinken wir und hören auf zu sein.



ジュリエッタ・ガイッチャルディ
(1784~1856) 象牙のミニアテュール画



1802年のベートーヴェン
象牙のミニアテュール画

(二) 曲目解説 ベートーヴェンが一八〇一年、三十一才のときに作曲した。『月光ソナタ』という愛称はドイツの音楽評論家、詩人であるルートヴィヒ・レルシュタープが、ベートーヴェンの死後五年が経過した一八三二年に、この曲の第一楽章を「スイスのルツェルン湖の月光の波に揺らぐ小舟のよう」と表現した。以後、『月光ソナタ』という名称がドイツ語や英語による出版物において使用されるようになり、十九世紀末には、この名称が世界的に知られるようになる。ロランは、『ベートーヴェンの生涯』でこの曲について以下のように述べている。

『一八〇一年に彼の情熱の対象はジウリエッタ・ギッチャルディーであったらしい。彼は、いわゆる「月光曲」と呼ばれる作品二十七番の有名なソナタ(一八〇二年)をこの人に捧げることによってこの女性を不滅化した。』(『ベートーヴェンの生涯』片山敏彦訳 岩波文庫三十
一頁)

三. ベートーヴェン 『十二のスコットランド歌曲集』WoO. 156 十一曲「過ぎ去りし懐かしき日々」
(二) 演奏 パトリック・クラーク・ソプラノ エドガー・フリード・テノール ジョン・ノーブル・バリトン ペーター・ペッティンガー・ピアノ エリザベス・ペリー・ヴァイオリン フェリックス・シュミット・チェロ

(二) 曲目解説 ベートーヴェンは一七九曲もの民謡編曲を残した。大部分はイギリス民謡の編曲である。この曲は、明治十四年、日本に卒業式歌「蛍の光」として親しまれている。酒をくみかわして友との再会を喜ぶ歌なので、ベートーヴェンの編曲も快活である。

